

## 裸足のファイター

Tough feet and a bloody badguy by Jack



「ジャクソンさん？」

軽くドアを叩いて開けると、ホールの照明が暗い部屋に差し込んだ。

セレーナは用心深く室内に足を踏み入れた。彼女は素足だった。ホールの明かりだけでは、室内の様子は伺えない。家具らしきものがぼんやりと見える程度だった。物音ひとつしない。床を用心深く踏みしめる足裏の感覚のみが、彼女が感じているすべてだった。

闇の中で、男はにやりとほくそ笑んだ。

ドアから差し込む光を背後から受けて、若い女のシルエットが浮かび上がっていた。彼女は完璧だった。きちん整えられたショートヘア。地味なトレンチコート。長い脚にフィットしたジーンズ。

ゴージャスな美人だが、そのように振る舞うことを好むタイプではない。きまじめで、その美貌やナイスボディを強調するタイプではないが、しゃぶりつきたくなるほどセクシーだ。もうすぐ、彼女は俺のものだ。

屍となって……。

セレーナ・ジェイユブズは、ジャーナリズム学校から与えられた仕事にありついたらばかりだった。来る日も来る日も、彼女は地方紙のために追悼記事を書いた。好奇心旺盛な彼女にとって決して本意な仕事ではなかったが、これも、一流ジャーナリストへの足がかりだとまじめにがんばっていた。

その夜、彼女は電話を受けた。ジャクソンと名乗る人物から、いま、この近辺を騒がしている「ジャックナイフ・キラー」について詳しく知りたければ、自分のアパートメントに来てくれ、とのことだった。

そして彼女は、来た。

彼女は、銃を持っていなかった。そんなものは持ったこともない。

信じられるのは、黒帯三段を得るほど鍛え上げられた自分の肉体だけだった。

セレーナの眼が、次第に闇に慣れてきた。だが、彼女は足裏の感覚を頼りに、部屋をすり足で探った。柔らかな足裏だけが、彼女に必要な情報を与えてくれる。

彼女は、素足でいるのが好きだった。いちばん大きな理由は、素足のほうが戦いやすいからだ。何度となく、彼女の素足が、彼女や友人たちを襲ってくる汚い男どもを粉砕してきたのだ。

さらに、彼女には特別の能力があった。足裏を床につけているだけで、その部屋の持ち主がどんな人間なのか、わかるのだ。

年齢は三十二歳の男。ニューイングランドの名門の家に生まれた放蕩息子。若い女性を切り刻むのが趣味。

その男は、彼女の正面に置いてある椅子を覆っている防水布の下に隠れている。歩いてくる彼女を捕まえようと、尻を張っているのだ。

セレーナは薄く笑った。あえて、餌に飛びついてみようと思った。

期待通りだ……。男の胸は高鳴った。彼女はまさに、自分が隠れている椅子に向かって歩いてくる。そして踵を返し、椅子に腰をおろした。

「はははっはあ！」

男は椅子の下から飛び出し、セレーナを床に投げ飛ばした。

「お前が取材したがつてる男は、目の前にいるぜ。ジャーナリストの卵が、評判のシリアルキラ―とご対面できたんだ。満足かい？」

男は眼をぎらぎらさせながらあざ笑った。

「残念だが、あんたが俺の記事を書くことはない。あんたはもうすぐ八番目の犠牲者になるからだ！」

言いながら、男はドアを閉めた。室内は完全な暗闇に閉ざされた。同時に、男は暗視ゴーグルを装着し、床にうづくまる美しい獲物を見据えた。

セレーナは微笑した。

男は、闇のなかに彼女を閉じこめ、暗視ゴーグルで優位に立ったつもりだろうが、男の背後の窓のあたりが、彼のシルエットを作っていた。それだけで、男がどこにいるのか、何をしようとしているのか、一目瞭然だ。

男は、ジャックナイフを手に襲ってきた。セレーナは素早く立ち上がり、男の手首を掴み、すどくねじあげた。男はナイフを落とした。

セレーナは右足を振り上げた。足の甲で、男の鼻をしたたかに蹴り上げた。

「ぎゃああ！」

男は悲鳴をあげ、血が噴き出す鼻柱を両手で押さえた。すかさずセレーナは、美しい足で、男の股間を蹴り上げた。彼女のつま先が、男の睾丸を打ち据え、ぐにやりと変形させた。その感触に、セレーナは満足げに笑った。男の苦痛、恐怖が、蹴り上げられた肉塊から、伝わってくる。

さらにセレーナは、男の顎にアッパーカットを浴びせた。男の身体は宙に跳ね上がり、どうと背中から落ちた。

激痛と恐怖に苛まれながらも、男のエゴがかるうじてそれに勝った。こんな女の子に負けてたまるか。男はなんとか立ち上がり、わめき声をあげながら、突進した。

隣の部屋はきれいに整頓されたキッチンだった。質素だが機能的で、厚い木の扉がついていた。突然、その木の扉の向こうから、奇妙な騒音が響いた。男が恐怖の叫びを発したのだ。

ガン！

扉が荒々しく開けられ、男は頭からキッチンにつっこんできた。よろめき、床に座り込んだ男は、苦痛の呻きをもらしていたが、呻きはすぐに恐怖の悲鳴に変わった。

キッチンの床に、ぺたぺたと裸足の足音が響き、セレーナが現れた。自信に満ちた顔で空手のポーズをとっている。

彼女は、床にうづくまる負け犬を見下ろして満足げに微笑んでいた。とろけそうな美しい笑顔は、今は恐怖を倍増させるものでしかない。

男は、がたがた震えつつ、両手をあげて降参の意を見せた。

「わ……わかったよ」

男は哀願した。

「お、俺の負けだ……何もしないから、このまま帰ってくれ……」

「帰る？」

セレーナは、足の指を動かしながら、あきれ顔で言った。

「あんたは、十人の女性を殺しているのよ、彼女たちの仇をとらせてもらおうわ」

男はわめきながら立ち上がり、ドアに向かって突進し、彼女を突き飛ばそうとした。セレーナ

の足がはねあげられ、男は逆に吹き飛ばされ、壁に背中をうちつけて呻いた。

「私は、人殺しじゃないけれど」

セレーナは、乾いた口調で言った。

「これまで、二十人ばかりの男を集中治療室に送ってやったわ。素手と、素足だけを武器にね。あんたも、同じ目に遭わせてあげるつもりよ」

男はもう破れかぶれだった。目に涙を浮かべながら突進してきた。セレーナはさっと横に飛んでかわし、またも男は壁に激突した。

振り向いた男は絶望的な攻撃を仕掛けたが、セレーナの足が飛んでくるほうが早かった。蹴りが三度、たてつづけに襲いかかってきた。一蹴り目は顔面に命中して鼻柱を砕き、二蹴り目はあばら骨を折り、三蹴り目は睾丸に命中した。

男は号泣し、右手で股間を、左手で血みどろの顔面を押さえ、床に転がって悶絶した。

哀れな嗚咽と苦悶の呻きをもらす男を見下ろしながら、セレーナの顔には歪んだ微笑みが浮かんでいた。

正義感に浸りつつ、その一方で、血と涙にまみれて悶える男の姿に、官能的な刺激を覚えていたのだ。

凶悪な殺人鬼が、小柄な若い娘の足下にひれふし、畏れおののき、悲痛な表情でこちらを伺っ

ているのだ。屠殺者を前にした家畜のように。

「や……やめてくれ」

男は仰向けに倒れたまま、やっと顔を起こし、必死に哀願した。

「警察に全部しゃべるから……何もかも白状するから……これ以上、いじめないでくれよ……ぎやああああああ!!!」

男は絶叫した。セレーナの指が、男の睾丸を鷲掴みにし、ひねりあげたからだ。

激痛に上半身を跳ね起こした男の顔面に二度、平手打ちを浴びせ、セレーナは言った。

「悪いけど、私、あんたみたいな奴を——女性差別主義者とか、犯罪者とか——虐めるのが大好きなの。一生、忘れられないひどい目にあわせてやることにしてるわけ。これから十分間のことを、あんたは電気椅子送りになるまで、絶対に忘れられないはずよ。人生でもっとも苦しい十分間としてね」

セレーナは、左手に睾丸を持ち替え、右手の拳を固め、鋭い突きを放った。一突き目はみぞおちに、二突き目は口に、そして手刀を首筋に浴びせた。さらに、喉笛をつかみ、男の後頭部を顔に押しつけた。

「でも、あんたみたいなシリアル・キラーをいたぶるのは初めてよ。私にとっては、生涯の記念ね。これに匹敵するのは……そうね、大学にいた時、二人の学生が私をレイプしようとしたから、睾丸を潰して病院送りにしてやった。七ヶ月、集中治療室から出られなかったそうよ。外科を退

院した後は精神科に回され、半年過ごしたわ。それから裁判で有罪になって監獄に入ったんだけど、そこでもずっ悪夢にうなされていたそうよ」

ひいひい泣きながら、必死に哀願する男に、もう一度平手打ちを食わせ、セレーナは思い出話を続けた。

「ハイスクールのときには、女の子に手をあげる生意気なフットボール選手をこらしめて、血だらけにしてゴミ箱にたたき込んでやったこともあるわ。もちろん、金玉はちゃんと潰した上でね。でも、あんたは別格ね。悪者という意味じゃ、あんたが一番、いたぶり甲斐があるわ」

男の号泣は頂点に達していた。

「ははは……泣き顔が可愛いわね。でも、もうじきグランドファイナーよ」

「や……やめて……」

男は必死に声を振り絞って哀願したが、セレーナにきつく喉を締め上げられ、声が詰まった。

「いい？ あんたは人殺しなのよ。大勢の女性を殺したのよ。それなりの報いを受けるのは当然でしょ！」

セレーナは睾丸と喉から手を離して立ち上がった。男が喉と股間を押さえて倒れる前に、踵でたたかき口を蹴った。男の歯がすべて折れ、血とともに飛び散った。さらに、拳と蹴りが雨霰と男を襲った。

男の顔は醜く腫れあがり、鼻は折れ曲がって血を噴き、唇は切れて真っ赤に染まった。両腕が

おかしな方角にねじれていた。

セレーナは攻撃をやめ、満足げに成果を見下ろした。男は、ひたすらなきじやくり、悶え、痙攣するばかりだった。

「や……やめて……もう……」

男は歯のない口をもごもごさせ、呻くしかなかった。

セレーナは首を横に振った。

「最後の一撃が残っているわ」

セレーナは、男の頭髪をつかんで無理矢理立たせた。そして、残忍な膝蹴りを、男の股間にぶちこんだ。男は白眼を剥き激しく痙攣した。さらに、二度目の膝蹴りが打ち込まれた。くずおれそうになる男の体を両手で支え、とどめの蹴りを打ち込んだ。

男の睾丸は破裂し、ズボンをはみるみる赤く染まった。

それからしばらく、若い素足の女性にうちのめされた凶悪犯の顔写真が、メディア上をにぎわせた。セレーナに憧れる女の子たちの多くが、護身術道場に殺到した。

一方でセレーナは、女性差別主義者たちにとっては憎悪的となった。腕力で男を叩きのめす生意気な小娘に挑みかかった無謀な男どもは、次々と返り討ちにされ、男性としての機能を奪われて病院送りとなった。セレーナはその様をビデオに隠し撮りし、メディアに売り込んだ。

やがてセレーナは、危険な犯罪多発地帯に果敢に潜入取材するレポーターとして名をあげていった。彼女の取材を妨害しようとする男どもが、睾丸を潰されたのたうつ度に、彼女のキャリアとギヤラはうなぎ登りにあがっていったのだった。